

## 68 中国古代における一般的医学観について

和田 裕 一

論者は、二松学舎大学在学中より、ライフワークとして、中国古代の医学技術史をテーマとして研究してきた。

前回の第九回日本医史学会学術大会では、『三国志』と『三国志演義』に見られる医療技術の比較を行い、華陀の医療技術の描写について両書を比較した。その結果、正統な歴史書である『三国志』では詳細な症例報告というべき内容であり、かつ「氣」の記述を見るのに比し、小説である『三国志演義』では「氣」の記述がなく、また体内異物のような神秘性の強い内容が見られることを指摘した。

また、それに先立つ第九七回日本医史学会学術大会及びその後に表示した卒業論文では、漢代の医療技術として、扁鵲・淳于意の望診の技術を挙げ、当時すでに望診

の技術が一定のレベルに達していたことを発表した。

これらは、扁鵲・淳于意であれば『史記』『扁鵲倉公列伝』、華陀であれば『三国志』『魏志方技伝』を主たるテクストとしたものであった。今回は、試みとして、これら歴史書に見える医療技術のパートのみならず、一般書に見える疾病の記録までを対象に加えることによつて、当時の人々が「病氣」や「死」をどうとらえていたかについて私見を述べたい。

たとえば『論語』でさえ、孔子やその弟子の病、さらには衛生観念についてまで、簡単ではあるが記述を見いだすことができる。たとえば、次のような例である。

「康子、葉を贈る。拝して之れを受く。曰く、丘未だ達せずと。敢て嘗めず。」(『論語』『郷党第十』)

「伯牛、疾まい有り。子、之れを問う。(中略)曰く、之れを亡ぼせり。命なるかな、斯の人にして而も斯の病有るや。」(『論語』『雍也第六』)

この二つ、とくに第一のエピソードは、『論語』の医療に関する記述としてはなほ有名であるが、『論語』を詳細に読むと、この他にもさまざまな医療関係の記述が存

在する。通常の中国文学研究者はそこに孔子の「天命」思想を見いだすのであるが、論者はまったく異なる立場から、これらの記述を利用するのである。

さらに、百家争鳴の時代においては、相手を論破するための比喩表現に、医療知識が頻繁に登場する。それは『韓非子』などで甚だしい。たとえば、次のような記述がある。

「安危は是非に在りて、強弱に在らず。(中略)殷は天子なり、而るに是非なく、(中略)僂をして天性を以てして背を剖かしめ、(以下略)」「韓非子」「安危第二十五」

ここでは、是非の基準の重要性を説くために、殷の無道の例として、背骨の曲がった者を生まれつきであるのにその背中を切り裂いた、と述べている。論者はここから、無道の例ではあるものの、当時そのような外科手術が可能だと一般に信じられていたことを見いだすのである。

以上のように、これらの記述は、当然のことながら正統な歴史書である『史記』『扁鵲倉公列伝』などに比べて、医療技術そのものを再現する材料としては問題が多い。

だが、逆に考えれば、当時の人々がその比喩や記述を受け入れたということは、少なくとも当時の知識階級にとつて、その表現は荒唐無稽なものではなかったことを意味する。すなわち、これらの一般書に見える医療の記録は、当時の人々の医学観を反映していると考えられることができる。

そこで、論者は今回、これら一般書の比喩表現などに散見される疾病・医療に関する記述をもとに、当時の人々の医学観について述べたい。

(インフォメーション・オン・デマンド株式会社)